

古名“波々迦”についての考察

大 谷 茂*

Identification of the So-called “Hahaka”

Shigeru OHTANI*

(With 2 text-figures and 2 plates)

はじめに

奈良時代に中国から亀卜の行事が輸入せられるまで朝廷でも行なわれたという鹿卜の行事があったことが古史に伝わっている。もちろん中国においても古代は鹿卜であった。

この鹿卜行事にハハカという植物が使われているのである。すなわち古事記の波々迦といい、延喜式の波々加木（ハハカギ）といい、また古事記・万葉集等の梓（アズサ）といい、何れも古い名であって現在の植物の何にあたるか、その解釈にむずかしい問題を提示しているのである。したがって多くの人によっていろいろと考証が行われてきたが、今日なおその定説はなく誠に疑わしい植物である。

著者はここに多くの人の試みた考証を通してハハカに関する一つの知見をここに発表する。

図版の標本写真は本館学芸員柴田敏隆氏の撮影したものであり、また本文挿入写真は赤星直忠先生の撮影したもので、ここに謝意を表する。

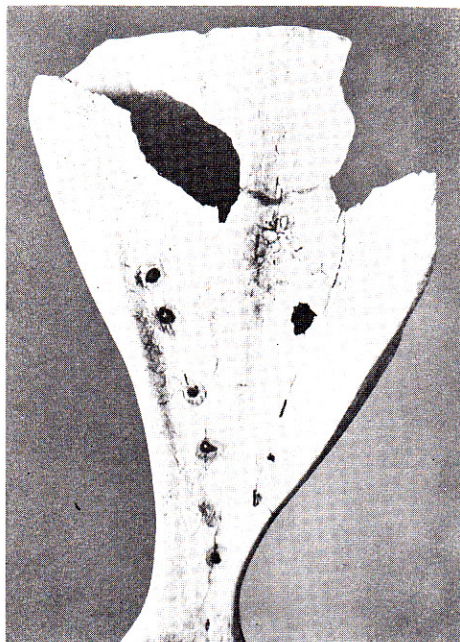
1. 亀および鹿をめぐる民俗と鹿卜

亀は昔から長寿を象徴する目出度い動物とされ、また海の神の使者として信仰され神聖な動物でもあった。したがって亀卜といって亀の甲を採って之を焼き占を試みるようになったのである。対馬や宍岐あるいは八丈島には亀卜を世襲とする家が今でも残っているようである。

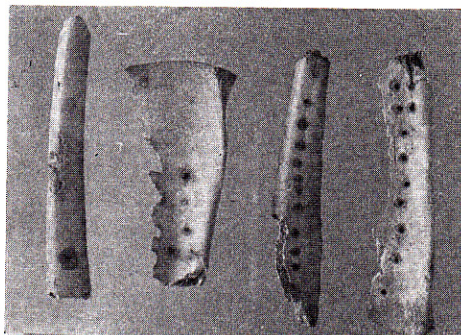
鹿は現在残る多くの民俗、神話が物語るように、恐らく未開時代から狩猟獣として人類に深い関係を持っていたと思われる。上代の神話には神が鹿となってあらわれる例が多いのである。奈良の春日神社は鹿を神使とし、春日の神鹿を見ることを吉祥として喜んだと古記録は報じている。宮城県金華山の神鹿といい、また巖島の神鹿といい人の知るところである。鹿の胎児は「さご」といって薬用として珍重されている。また農家の豊年を祈るのがシカ踊りの目的であって各地にその民俗的行事が今も残っているのである。著者は十和田と花巻でシカ踊りをしたしく見る機会があったが、東北地方とくに岩手県下には各地に鹿踊り「シシ踊り」といっている」の民間伝承が今でも残っているようである。

三浦半島における海蝕洞窟内には弥生式遺跡の存在することが赤星直忠先生によって明らかにされている。そこから出土された文化遺物中、卜用獣骨のあらわれたことは極めて重要なことである。半島の南端毘沙門海岸南っぱりの浜に面する断崖中腹にならぶ洞窟内と三浦市南下浦町松輪、小字間口通称「また」と呼ばれるところにある洞窟内から焦痕列を残した鹿の骨が出土された（1950）。多くは鹿の肩胛骨であるが、なかには肋骨を使ったものがある。小豆粒大の焦痕列が1列または2列、骨の表に或は表裏両面に残っている。焦痕部は若干凹んだものがあるが、中国古代の鹿卜に見られるような摺鉢状にまでは凹んでいない。しかし焦痕部の骨の表面が削られて滑らかにし

* 横須賀市博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka, Japan.



(1) 三浦市南下浦町毘沙門より出土された鹿の肩胛骨を使用した卜骨，
赤星直忠氏撮影



(2) 三浦市南下浦町毘沙門より出土された、卜用獣骨，赤星直忠氏撮影

であることは中国のものに類似している。このような卜用獣骨は三浦半島以外にその出土を聞いていないが、鹿卜遺物であって、日本においても鹿卜の行われていたことを物語るものである。
(三浦市南下浦町毘沙門から出土された鹿の肩胛骨)
(使用の卜骨は、東京国立博物館に保管されている。)
三浦半島に卜用獣骨が発見されてから、各地に注意されるようになって、その後、佐渡、鳥取、千葉、静岡などから出土されている。

古事記に天の波々迦というものがある。

「内抜天香山之真男鹿之肩抜而，取天香山之天波々迦而，令占合麻迦那波」つまり香具山の鹿の肩骨を抜いて、香具山の波々迦という木を取って、その骨を焼いて占をしたということがわかる。

2. 古名一波々迦は今日の何植物であるかその考証について

和名鈔では：朱桜，本草云，桜桃，波々迦一名爾波佐久良。といているので，まず桜の種類であることを認むべきであろうか。

古事記伝・古名録・古今要覧稿(1841)では：波々迦一樺。であるとしている。和名鈔で，かば一かにわ，本草和名でも，かば一かには，という和名がある。また和名鈔木具部を見ると樺。和名加波一名加仁波とあって，かば一かにば一かにわざくら。であって，“かにわざくら”と言うべきを“にわざくら”としたのであるといっている。しかし樺はカバノキ科植物でサクラ属とは縁遠いものだし，樺のほかにはハハカというものがあったにちがいないというのが今日多くの人の考えるところである。

ハハカは一体何であろうか，波々迦はウワミズザクラであると始めていったのは野呂元丈という人である。

神巷談苑(榊原玄輔著一享保の頃の医者で本草学者，宝永3年死去)に：「波々迦の木とは，卜する時に亀を焼く木なり。昔より亀卜は公家に伝わって今にあり，思金命香具山の鹿の肩を焼き占うに波々迦の木を用い給いしとぞ，波々迦は今のイヌザクラという木に似て北国にて，ミズ，またウワミズ，ミズメザクラともいう。実をサクラボンというとぞ野呂元丈申されし」。

亀卜の行事は今でも沓岐国に伝わっている。ここにいう香具山は古事記の香具山であるから亀卜でなく鹿卜である。野呂元丈は享保の頃の医者であり本草学者でもあって日本の高山を採薬に歩いた人である。この野呂元丈はハハカはウワミズザクラだといったが，何故ウワミズというサクラで

あるかとその理由その証拠は何もいっていない。

これを始めてはっきりさせたのは白井光太郎博士であって白井先生は植物方言からハハカはウワミズザクラであるとされたのである。ウワミズザクラの方言名に：ホウゴ（日光地方）、ホンゴウザクラ、ホウゴウザクラ、コンゴウザクラがある。日本の仮名遣いではハハキ→ホウキ、ハハソ→ホウソとハが2つつづくと延びる傾向があるので、ハハカ→ホウカ→モウカ→ホカ→ホカノキ→ホウゴとかわり、これがさらに訛ってホンゴウ、ホウゴウ、コンゴウになったと考えられるハハカ系方言名が今でも残っている。近くは御大礼の時の鹿卜に、ハハカを用いるに就て、日光からウワミズザクラをホウカとして取寄せられ用いられたということを知っている。

ところが今日も「ホウカ」といわれている木が他にある。

畔田伴存の著、「熊野物産初志」に：ホカノキとして図説がある。この紀州熊野のホカノキは葉、常緑で縁に棘があるという図説から見てもヒイラギガシまたはタデキといわれるリンボク（バラ科、サクラ属）である。

伴信友の作った正卜考（弘化元、1844）に沓岐国の亀卜に用いるホウカの図があって、葉が常緑で一寸花が咲かないと書いてある。

熊野のホカ、また沓岐でいうホウカはヒイラギガシ一名タデキのことで今日のリンボク（一名ホカノキ、ヒイラギガシ、ヒメヒイラギ、カタザクラ、アオガシ、タデキ）である。ウワミズザクラもリンボクもバラ科のサクラ属の樹種であるが、前にのべた古事記伝などでいうハハカは樺であると考証した樺はカバノキ科である。ところがこのカバノキ科のミズメという樹種にモウカザクラの名がある。モウカはハハカ→ホウカ→モウカでやはり古名ハハカに由来するハハカ系方言名であることがわかる。

3. 三樹種について

白井博士はハハカはウワミズザクラと断定されたが、なおリンボクである可能性も充分残っているし、また方言を通してみればミズメではないとはっきりいえないのであって、古名ハハカといたった木に同一方言名をもつ3つの樹種が浮び上がってくるのである。

ここで3樹種は如何なる植物であるかその分布や性質などにふれて見ると：

(1) ウワミズザクラ（バラ科、サクラ属）

Prunus Grayana MAXIMOWICZ

葉は落葉。花序は総状、基部に1～3の葉がつく（イヌザクラには花序に葉がない）。萼は花後脱落する（イヌザクラは宿存する）。樹皮は紫黒色。

分布：北海道（石狩低地帯以南）、本州、四国、九州（熊本県南部まで）で温帯を中心に分布している。

(2) リンボク（バラ科、サクラ属）

Prunus Spinulosa SIEB. et ZUCC.

葉は常緑。花序は総状、基部に葉がない。萼は花後脱落する。花の咲きにくいもので小さい中は花が咲かず老木にならなければ容易に花が咲かない。樹皮は黒褐色、（小枝は暗紫色）横縞の桜膚、老樹になると粗い凹凸ができる。

分布：本州（茨城、福井両県以南）、四国、九州（尾久島、種子島にはない）、対馬、奄美大島、沖縄の暖帯地に分布し日本列島特有種である。

(3) ミズメ（一名ヨグソミネバリ、アズサ）カバノキ科

Betula grossa SIEB. et ZUCC.

葉は落葉。花果も葉形もウワミズザクラやリンボクとは全くちがっている。樹皮は黒褐色ま

たは暗灰色，若木では平滑で横縞の桜膚をしているが，老木になると鱗片状に不規則に割れる。枝にサロメチールのような特有の香りがある。

分布：本州（岩手県以南，しかし東北地方の裏日本側には殆んど見られない。また房総半島，伊豆七島にはない）四国，九州（南は大隅の高隈山まで）に広く分布している。

4. 三樹種に対する現存の方言名

古名ハハカは3樹種のうち一体どの種であろうか，一つの種と定めることに無理があるのであるうか，今しばらく結論を残して，この3樹種について現存する方言を見ることにすると：

〔ウワミズザクラ〕

ナタズカ（越後，北魚沼郡頂原・尾瀬沼地方→会津，檜枝岐）。

ミズネまたはミズネザクラ（越後，北蒲原郡・上州，戸倉地方）．またニズネ（東蒲原の山村）。ミズノキ（越後，北蒲原郡三川温泉），しかし同部ではミズメのことをミズノキともいっていることは注意すべき点である。

モウカ（四国，土佐郡本川村地方），ウワミズザクラをモウカともいっているが，この地方で普通にモウカとよんでいるものはミズメである。この点も注意すべきところである。

ハンサ（岡山県美作地方および三重県一樹種名方言集）。

ヘコキザクラ（東濃恵那山南麓上村・新城市・三河段戸山）。

ショウベンザクラまたはヘッピーザクラ（武蔵，所沢．イヌザクラにもこの方言名があって混同している）。

クソザクラ（長野県下伊那郡大鹿村．播磨，内海功一氏・岡山県，樹種名方言集）。および美濃揖斐郡徳山村—メズラノキともいっている。

ヨグソザクラ（山梨県河口湖地方．樹皮臭いといっているのので，ミズメと混同している）。

モモザクラ（相模，西丹沢中川の支流西沢の大棚—再調を要するもの）。

ヨゴソザクラ（相模，西丹沢．ミズメと混同しているのであろうか）。

イヌザクラ（遠州，水窪地方）．遠州秋葉山ではイヌザクラをクソザクラともいっているし，ウワミズザクラとイヌザクラを混同しているようである。里人がイヌザクラかウワミズザクラか区別できないのは当然のことである。またその必要性もなかった。

〔リンボク—名ヒイラギガシ〕

ヤマタデ（日向，延岡および西都市三納村地方．豊後，大隅），大隅の鹿屋ではヤマザクラをタデといっている。

タデキまたはタデ（伊豆地方）。田中芳男手記（明治11．9．16，1878）に「緒方道平より申来るに伊豆狩野辺にて“タデ”と唱え葉袋紙の染草になるよし村民話なり云々」とある。

ハンシャ（紀州尾鷲地方—川口三好次氏）またイヌハンサ（伊勢度会郡七保村）。

フユバザクラ（周防の国滑国有林の里人．土佐高岡郡東津野村）。

イヌザクラ（伊勢南部から紀州東北部に広く分布，久保文良氏）。

ニマメノキ（鳥田智庵著，両国本草—1737，長門の部にニマメサクラ—名コマンデ．また周防の部にニマメノキ—名山タデ或は犬タデ）とある。白井光太郎著，樹木和名考（昭和8，1933）に“ニマメノキはサクラ科の常緑高木である”としているのでリンボクにあてていられることがわかる。しかし両国本草の元になっている長門産物帳によれば，ニマメザクラ—名コマンデは明らかにウワミズザクラであるといわれている。

〔ミズメ—名ヨグソミネバリ，アズサ〕

ヤマダチ（陸中で広くいわれている）。なお三陸植物志（1935）にはタデ，タンデ，タンデン，ヤ

マタチの方言名もっている。

ナツツカ（越後，東蒲原および南蒲原地方）。

ミズネ（会津，檜枝岐地方ではソリを作るによいとっている）。またニズネ（越後，東蒲原）。

イトモウカ（日向），モウカサクラ（日向，西都市三納村）。このモウカ或はモウカザクラの方言名は四国，九州に広く残っている。また高野山の植物（1940）には東北の一部でもミズメにモウカザクラの名があるとでている。

ニマメザクラ（山口県宮野地方，および滑の里人）。

ハズサ（大和川上村三ノ公）。またハンサ（美濃揖斐郡徳山村，および伊勢度会郡七保村）。

ヤマタデ或はアズサ（田代安定著，鹿児島県草木譜，1873）にヒメヒイラギ一名ヒイラギガン。方言ヤマタデ，アズサ→ハズサ→ハンサがあげてある。そして“古来世に伝称するところのアズサ弓は即ち此材にて作るもので弓弩となすに適宜の弾力を有し剛柔宜しきを得て他材に優る云々”と白井博士は樹木和名考にも引用している。田代安定氏はリンボクの方言名にヤマタデ，アズサをあげているが，白井光太郎博士はアズサはミズメだとしているのである。

ミズメは里人が好んで道具類の柄に賞用したもので運動器具用材として林業上有用樹種であるため山里の人たちは誰れでも知っている親しみのある樹種である。現在では梓弓のアズサはミズメというのが定説となっている。（倉田先生は地方によってはリンボク或はウワミズザクラも使われていたのではなからうかといわれている）。したがってミズメをアズサ（関東・中部地方），ハズサ，ハンサ（近畿・中部地方）ハンシャなどと呼んでいるアズサ系方言名が今でも多いわけである。

樹種名方言集（昭和7）にはミズメ→ハンサと称している地方は相当多く，紀州，岐阜（飛騨），富山，石川，福井，滋賀をあげている。また紀伊統風土記物産（1835）にあげているハズサー一名ハンサー一名ハンシャ一名水メザクラは，説明からはミズメであるが“高木にして専ら屋材に用ゆ木理桜に似たり，葉はハリノキの葉に似て，厚く堅く縮小にして紋脈葉面に粗く顕われ，葉の本少し欠て，粗き鋸歯あり，二葉ずつ互生す。土人の説に，5月小白花を開き形バラ花の如く後桜実の如く青しと云々”と書かれている土人の説はミズメ（アズサ，ヨグツミネバリ）ではない。ミズメの花は黄褐色の多数の細かい花であって果実も桜とは異なるものである。土人のいうところのものはウワミズザクラにあたる可能性がある。

ヤマザクラータデ（大隅）。カナクギノキ（クスノキ科）ータデまたはタデキ（四国樹木名方言集，1936）。アセビ（ツツジ科）ータデ（土佐）またタデシバ（伊予，宇和島）。カラスザンショウ（ミカン科）ータデギの方言名が残っているが再調を要する課題である。

5. 結 論

（1）リンボクとミズメの両樹種については各地に同一方言名が残っている。ヤマタデ，タデ，ニマメノキ，またニマメザクラといわれ，またハズサ，ハンサ，ハンシャのアズサ系方言名も残っていて古来からこの二樹種はいろいろに混乱されてきている。ところが現在伊勢の度会郡七保村ではミズメをハンサといいリンボクをイヌハンサと区別して相似たものとして土人に認識されている。また山口県滑国国有林付近の里人はミズメをニマメザクラと呼び，リンボクをフユザクラとして区別している。土佐高岡郡津野村でも冬葉桜といって常緑のリンボクを土人ながら認識している。

（2）ウワミズザクラとミズメについても両樹種間に同一方言名が残っている。ナツツカ，ミズネ，ニズネ，モウカの如き方言やハンサの如きアズサ系方言名が今でもある。越後北蒲原郡ではミズメをミズノキといっているが同郡三川温泉地方ではウワミズザクラをミズノキといっている。また四国土佐郡本川村では普通はミズメをモウカといっているが，ウワミズザクラをもモウカと呼ん

でいる。ウワミズザクラにショウベンザクラ、ヘッピリザクラ、ヨグソザクラ、クソザクラ、ヘコキザクラの方言名が今日各地に残っているが、ミズメの別名をヨグソミネバリともいって枝にサロメチールのような特有の香りがあるが一度経験したら忘れられない臭気がある。したがって里人は両樹種を混同したものであろう。

(3) このようにしてウワミズザクラを現在アズサ系の方言名で呼んでいるところは少ないが三樹種が混同されてここにむずかしい問題を提供してきたのである。それは三樹種それぞれ花や葉が大変異っているが、前にのべたように樹皮は何れも横縞の桜膚で、材はち密強靱で、山の人の利用上ほとんど区別する必要を認めなかったものであろう。三樹種とも山里の生活との結びつきが著しいもので、その上樹皮や材が似ているので利用上混同され同一方言名が各地に生れたものと思う。

(4) ウワミズザクラとリンボクの両樹種間に古名はホカ、ホカノキ、ホウカの共通名があるが、不思議なことに現在方言名に同一のものがほとんど残っていない。

(5) ウワミズザクラとリンボクは同じバラ科のサクランボ属のものであるが、ミズメは花果も葉形も全く異ったカバノキ科植物で分類学上縁遠いものである。鹿卜に使ったというハハカはかつては三樹種ともハハカと混同され呼称されたという人もあるが、それは里人の利用上支障がなかったための混同で、それだからといって、鹿卜のハハカは三樹種何れもだと決めるのは危険である。卜用に使ったハハカはウワミズザクラかリンボクとするのがむしろ妥当である。

(6) 鹿卜ではないが飛騨国の神事にシロキとクロキというものがある。それはハハカの実をいって粉にし之を白酒にまぜて黒い酒クロキを造るとある。

ウワミズザクラが食用として利用されることは古くから知られている。伊藤圭介著“日本産物志”山城部下巻に「立秋の頃実熟す大さ赤小豆許にして端尖り色緑黄後紫黒、肉味微甘、仁は白くして堅く味梅仁の如し、此実を祇園にて塩蔵し酒を笔むるの料となす」とある。今でも越後ではその花穂のなのお蕾の時之を塩漬として食用にしている。長岡ではマンニンまたはアンニンゴと呼んでいる。また果実の塩漬を杏仁子といって売っている。

飛騨の神事に使ったハハカは恐らく酒をつくることから、食用のウワミズザクラであると考察できるのである。

(7) 鹿卜に使ったハハカはウワミズザクラかリンボクの可能性が強いのである。正卜考に云う老岐の国の亀卜はリンボクであることにはまちがいが無い。このことからして卜占の行事に使う樹種はリンボクが原則であって、たまたま日本においては神事の神酒に使われ、また里人になじみのあるよく似た樹種ウワミズザクラを慣用してきたものと思う。このことはリンボクが老木にならないと開花しないので花のよく出る、しかもよく似た樹種を使ったと思う。しかしその断定は困難なもので深く中国の卜占に関する民間伝承をさらに研究しなければならない。何れにしても今後の課題として興味あることがらである。

ウワミズザクラは温帯を中心に分布する樹種であり、リンボクは暖帯地に分布する樹種である。そしてミズメは山地性だがウワミズザクラやリンボクは低山地帯のものである。本県でもリンボクは逗子の神武寺付近に残存した湯河原の日金山道中腹以下の地点でいくらかでも見られる。ウワミズザクラは本県では横浜下永谷、芹ヶ谷などか、武蔵の地域に普通に見るものである。神事や卜占に山深いところにあるミズメを使ったとはどう考えてももうなずけない。容易に採ってこられるリンボクかウワミズザクラを使ったにちがいない。正卜考に示すようにリンボクの可能性が強いが、リンボクが認識しにくいのでウワミズザクラを代用し慣用化してきたものであろう。ハハカはリンボクであるという説を高く指示するものである。

Summary

Until the Nara Era, when “turtle divination” was introduced, divination even at court in



Fig. 2. *Prunus spinulosa*. Kurozuka, Kiyosumiyama,
(Prov. Kazusa), Chiba Pref. リンボク (千葉県清澄山黒塚,
倉田悟, Early in Sept., 1960).

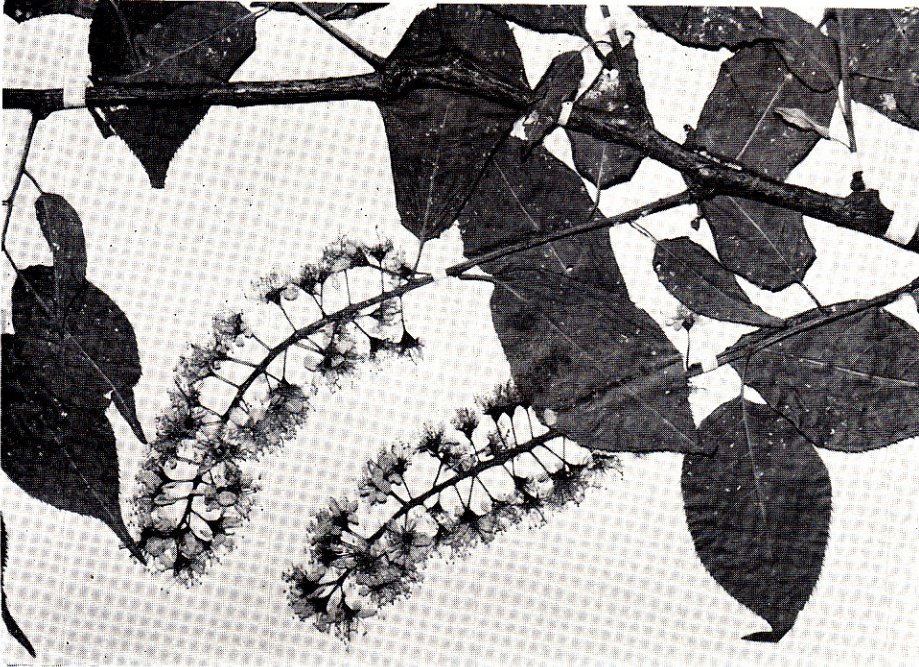


Fig. 1. *Prunus Grayana*. Nikko Botanical Garden,
Nikko, Tochigi Pref. ウワミズザクラ (栃木県日光植物園,
中村七郎, May 11, 1957).

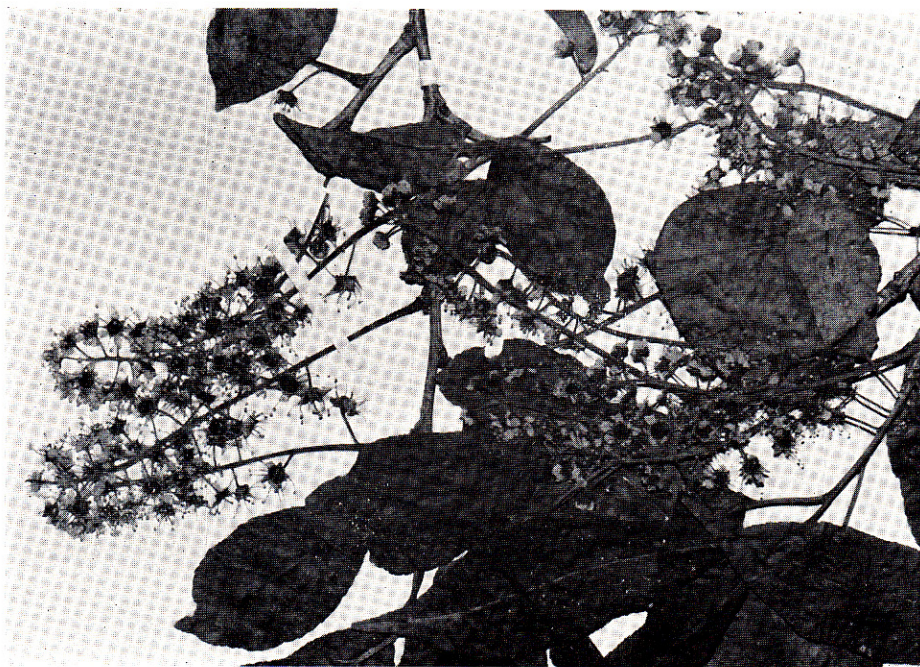


Fig. 3. *Prunus Buergeriana* MIQUEL. Nikko Botanical Garden, Nikko, Tochigi Pref. イヌザクラ (栃木県日光植物園, 中村七郎, May 24, 1957)。



Fig. 4. *Betula grossa*. Oze, Gunma Pref. ミズメ, ヨグソミネバリ (群馬県尾瀬, 鈴木重隆, Jul. 27, 1955)。

Japan was performed by burning the shoulder bones or the ribs of a deer and divining the future of the country or the success or failure of the harvest by observing the ashed. When this was done a plant called “hahaka” was used for the burning. There are various theories about the identification of this plant. The following three trees have been suggested: *Prunus Grayana* MAXIM., *Prunus spinulosa* SIEB. et ZUCC., *Betula grossa* SIEB. et ZUCC. It is the author's opinion that these trees were not precisely separated by the ancients, and that all three were called “hahaka”. The flowers and leaves of the 3 are all quite different, but the bark is typical cherry, and the wood is fine-grained and hard. Certainly there would have been no noticeable difference in its use for burning. However, the author thinks that *Prunus spinulosa* is the most likely candidate.

引 用 文 献

- 赤星直忠, 1953: 海蝕洞窟—三浦半島における弥生式遺跡, 神奈川県文化財調査報告 20: 84, 98, 115, 138. 横浜。
- 倉田 悟, 1962: 日向のヤマタデと陸中のヤマタデ, 樹木と方言: 77—78. 東京。
- 倉田 悟, 1962: ムラサキシキブとお婆さん, 樹木と方言: 91. 東京。
- 倉田 悟, 1964: 日本林業樹木図鑑: 70, 140, 144. 東京。
- 倉田 悟, 1967: 続 樹木と方言: 49, 101, 104, 145, 156, 157, 173, 176, 182. 東京。
- 牧野富太郎, 1930: 食用としてのウワミズザクラ, 断枝片葉 (44), 植物研究雑誌 7 (2): 64. 東京。
- 白井光太郎, 1932: 古事記に見えし植物 (承前), 植物研究雑誌 8 (3): 106~110. 東京。